



根来寺坊院跡

—発掘調査10年の歩み—

平成3年3月

和歌山県教育委員会

根来寺坊院跡

——発掘調査10年の歩み——



根来寺坊院近景（南上空より）



塔頭子院跡全景



城郭を想わせる石垣



円明寺逆修石塔群



半地下式倉庫



金銅製十一面観音懸仏



金銅製賢瓶



中国製青磁



根来塗碗



元 青花染め付け片口

交 三彩仏座 (上) 青白磁梅瓶 (下)

序 文

宗祖覺鑊により開創された根来寺は高野山・熊野三山と並ぶ県下の聖地であることは皆様よくご存じのところであり、中世末期秀吉の根来寺焼き討ちにより大きな打撃を受けたものの、今なお歴史的なたたずまいの中、県民の憩いの場ともなっています。

昭和55年度より10ヶ年計画で着手しました第一期の根来寺坊院跡発掘調査の経緯と成果については別に述べるところでありますが、県農林部が紀ノ川北岸の農業基盤整備の一環として着手した広域営農団地農道整備事業、いわゆる大規模農道の建設が根来寺地域に及んだときの「根来寺を守る会」ほか皆様の熱意あるご協力と、根来寺の保護資料が作成できるまで建設を中断し、さらにルートの変更により根来寺坊院跡の最も重要部分である円明寺地区を迂回する英断を下された県農林部の双方に敬意と感謝を表します。

また、この間、宗教法人根来寺と財団法人和歌山県文化財センターと県教育委員会が合同で実施した「根来寺展」では専門家のみならず、一般の方々のご理解をいただけたものと確信する次第です。

このように関係各位・諸団体のご理解をいただき、10ヶ年の調査を無事終了し、ここに調査成果と根来寺坊院跡の保護について提案する運びとなりました。特に根来寺坊院跡の保護については文化財保護行政の責務として取り組む所存でありますので、地域の方々をはじめ県民の皆様、また関係機関各位の一層のご協力をお願いします。

平成3年3月31日

和歌山県教育委員会
教育長 高 垣 修 三

例 言

- 1 本書は和歌山県教育委員会が昭和55年度より10ヶ年で実施した第一期根来寺坊院跡発掘調査の概要と根来寺坊院跡保存・整備の指針（案）を示したものである。
- 1 発掘調査の詳細については各年度に報告書を刊行しているので参照されたい。
- 1 発掘調査事業は昭和55年度から同61年度までは社団法人和歌山県文化財研究会に、昭和62年度から平成元年度までは財団法人和歌山県文化財センターに委託して実施した。
- 1 本書の作成は和歌山県教育庁文化財課文化財技術班が担当し、同主任藤井保夫が実務に携わった。
- 1 本書の作成に当たっては、財団法人和歌山県文化財センター、宗教法人根来寺の協力を得た。
- 1 本書には岩出町教育委員会の協力を得て、同委員会が実施した調査の一部を掲載した。また、大規模農道建設にかかる調査成果についても併せて紹介した。

目 次

第1章 根来寺の概要	1
1 根来寺の位置	1
2 開祖 覚鑑	2
3 根来寺の文化財	3
(1) 国指定文化財	3
(2) 県指定文化財	4
(3) 町指定文化財	4
第2章 根来寺坊院跡の発掘調査	5
1 大規模農道の建設と発掘調査	5
2 10ヶ年計画の発掘調査（第一期発掘調査）	5
(1) 調査の目的と調査経過	5
(2) 調査成果	5
イ 遺構	5
古道	5
大門	6
円明寺	6
塔頭子院	9
備前焼大甕をもつ遺構	10
町屋と根来塗工房	11
城砦の遺構	12
その他の遺構	12
ロ 遺物	12
仏具等	12
瓦類	13
武器・武具	13
根来塗	13
土師器・瓦器類	13
国産陶磁器	13
中国製磁器	13
その他の輸入陶磁器	14
(3) 小結	14
第3章 根来寺坊院跡の保存	27
1 趣旨	27

2	保存整備計画(案)	27
(1)	史跡指定計画と買取計画.....	27
(2)	第二期発掘調査計画.....	28
(3)	史跡公園整備計画.....	29
	イ 遺構展示地区.....	29
	ロ 立体復元地区.....	30
	ハ 修景地区.....	30
	ニ 山林保全地区.....	30
	ホ 施設地区.....	31
3	開発との調整と史跡管理.....	31

図 版 目 次

図版 1	航空写真	図版16	桃坂地区調査地点
図版 2	円明寺跡(1)	図版17	大門南調査地点
図版 3	円明寺跡(2)	図版18	密蔵院西調査地点
図版 4	円明寺跡(3)	図版19	仏具・鏡・硯
図版 5	昭和55年度調査地点	図版20	軒丸瓦類
図版 6	昭和56年度調査地点	図版21	軒平瓦・道具瓦
図版 7	昭和57年度調査地点	図版22	土師器・瓦器・瀬戸焼など
図版 8	昭和58年度調査地点	図版23	瓦質土器・武具・刷毛など
図版 9	昭和59年度調査地点	図版24	備前焼(1)
図版10	昭和60年度調査地点	図版25	備前焼(2)
図版11	昭和61年度調査地点	図版26	中国製白磁
図版12	昭和62年度A調査地点	図版27	中国製青磁
図版13	昭和62年度B調査地点	図版28	中国製青白磁その他舶来陶磁器
図版14	昭和63年度調査地点	図版29	中国製染付磁器
図版15	平成元年度調査地点	図版30	中国製染付磁器細部

挿 図 目 次

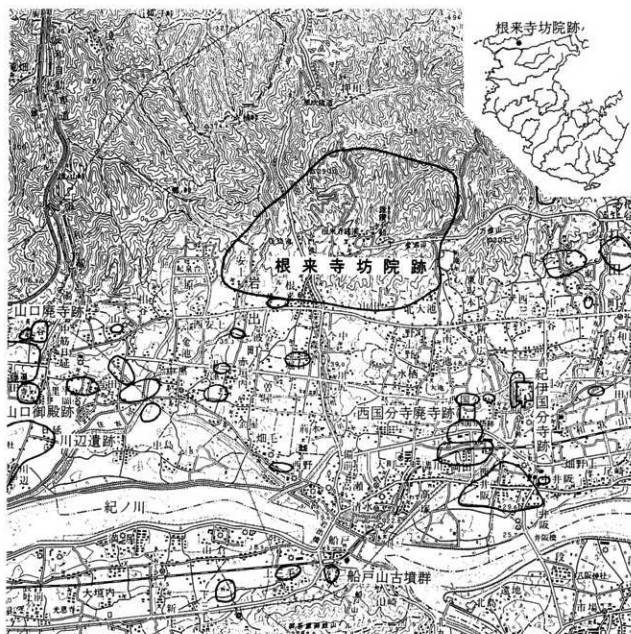
第1図	位置図	1
第2図	一乗山根来寺傳法院図	2
第3図	円明寺古図	3
第4図	古道の調査状況	6
第5図	南古大門跡礎石抜取穴	6
第6図	根来寺山内地形図と調査地点	7, 8
第7図	円明寺石塔群出土状況	9
第8図	盆地部の塔頭子院	10
第9図	谷間部の塔頭子院	10
第10図	半地下式倉庫	11
第11図	井戸	12
第12図	泉水	12
第13図	軒丸瓦	15
第14図	軒平瓦	16
第15図	土師器、土師質土器、瓦器	17
第16図	瓦質土器	18
第17図	備前焼	19
第18図	備前焼大甕、美濃・瀬戸系陶磁器	20
第19図	常滑焼	21
第20図	伊万里焼その他の国産陶磁器	22
第21図	中国製白磁、青白磁、青磁	23
第22図	中国製青磁、交趾三彩、天目	24
第23図	中国製染付磁器	25
第24図	石製品、硯、石鍋、石白他	26
第25図	第二期発掘調査計画図	28
第26図	露出展示例（福井県一乗谷朝倉氏館跡）	29
第27図	立体復原案	30

第1章 根来寺の概要

1 根来寺の位置

根来寺は、紀ノ川の北岸、和泉山脈山麓部に位置し、行政区画では那賀郡岩出町根来地区に所在する。この山麓部は中央構造線に沿った破碎帯が東西に延びるため、根来寺も山麓部にありながら南側に丘陵をもった盆地状の地形に営まれており、密教の聖地にふさわしい地勢に営まれている。

しかし、一方では、南側の丘陵（前山と呼ばれている）の南側を東西に走る県道粉河加太線の前身は律令制下の南海道であり、根来寺の西側を南北に走る県道泉佐野岩出線は、古くは根来往還と呼ばれ風吹峠を超えて大阪府の信達に至る主要街道であり、中世に根来寺が隆盛していく基盤に交通路がおおきな要素となっていたことは注意せねばならない。



第1図 位置図

2 開祖 覚鑊

根来寺は覚鑊の開創になるもので、高野山の太真院に始まることは周知のとおりである。覚鑊は高野山での修学を盛んにするために伝法二会の再興を期し、その道場として伝法院（後、太真院と改称）を開いた。

太真院を中心に新義教学が盛行したが、金剛峯寺衆徒の反発を招き深刻な抗争に発展した。このため、覚鑊は保延6年（1140）頃、高野山を下り、太真院所領の弘田庄にあった豊福寺内に建立していた円明寺（現、根来寺山内）に移ったとされている。

覚鑊の退隠後も金剛峯寺を中心とする古義派との抗争は止まず、寛元年間（1243～1247）の頃、金剛峯寺衆徒が太真院に放火し、堂塔が焼失したといわれている。

ついに、正応元年（1288）、太真院と覚鑊の私坊であった密厳院は一門の衆徒とともに高野山を離れ根来に移り、太真院、密厳院、円明寺、豊福寺のほか98子院等からなる一大伽藍が建立されるに至った。（第2・3図）



第2図 一乘山根来寺傳法院図（「根来寺に関する総合的研究」より転載）

その後は、室町幕府との関係も確かなものとなったようで、幕府から根来寺所領の安堵を受け隆盛し、戦国期に入ってから、行人方と呼ばれる僧兵集団が出現し、鉄砲伝来後、いち早く射撃と製造に習熟したといわれ、各地の紛争に関与した。

いわゆる傭兵として活躍した彼らは八千人あるいは一万人にも達したとも言われ、彼らを擁した坊院は2700宇あるいは3500宇にも及んだと伝えられたが、羽柴秀吉による泉州からの紀州侵攻により、天正13年（1585）のいわゆる根来焼討ちにあい、大塔、大師堂を除くほとんどの諸堂、塔頭子院が焼亡した。

秀吉の焼討ちの後、根来寺の復興は早く、寛永10年(1633)には山内81か寺の坊院が知られる。さらに、慶長年間(1595～1615)、智山、豊山両派の支配下となっていたが、宝暦元年(1751)頃、紀州藩主、徳川宗直の援助を得て、新義真言宗の本山として独立する。いわゆる、根来寺中興と呼ばれ、大伝法院、密厳院、円明寺、豊福寺を中心に、小谷、蓮華谷、西ノ谷などの谷間部にも坊院が復興された。

しかし、その後の坊院は減少の一途を辿り、現在では水田に残る区割りや、山間部、谷間部にも確認できる区割りが、東西、南北2 km以上にわたって、根来寺興亡のタイムカプセルとして地中に埋もれている。



第3図 円明寺古図（「根来寺展」より転載）

3 根来寺の文化財

天正の兵火により山内のほとんどを焼失し、わずかに、国宝の多宝塔(大塔)、重要文化財に指定されている大師堂のほか、県指定の不動堂などが残るのみである。なお、根来寺本坊奥書院の裏庭周辺は国名勝の庭園となっている。

(1) 国指定文化財

根来寺多宝塔 すなわち大塔は、昭和14年の解体修理の際発見された多数の墨書により天長2年(1429)に建立の計画が立てられ、天文16年(1547)に完成したことが知られた。細部の手法は室町時代の特徴を示し、頭貫鼻の存在など唐様の影響もみられるが、現存する多宝塔のうち最大で、かつ、大塔形式をうかがえる唯一の遺構として室町時代中期の重要な建造物である。

根来寺大師堂 建立の由緒は大塔のように明らかではないが、本尊の胎内銘により明徳2年(1391)に入仏供養が行われたことが知られている。方三間の宝形造で、厨子及び須弥壇とともに指定を受けている。多分に鎌倉時代の様相を示し、その形式手法から室町時代中期を降らないものと考えられている。堂内部も旧状を良く残し室町時代のこの種の堂形式をみるうえで格好の遺構とされる。

根来寺庭園 享和元年、紀州徳川家の吹上御殿御座所の移築に際し造園されたものと考えられている。奇岩怪石を縦横に配置した池泉式蓬莱庭園であるが、造園家の名などこれに関連する資料はない。

(2) 県指定文化財

根来寺不動堂 県指定文化財の不動堂は八角円堂、本瓦葺で、元禄年間(1688~1704)の建立になるものかと考えられている。室町時代前期頃の形式を残す露盤や、江戸時代初期の手法を示す鬼瓦などを用いており、前身建物の規模、手法等をよく踏襲したものとみられ、数少ない八角円堂の遺構として貴重である。

(3) 町指定文化財

根来寺大門 境内の西部に位置する五間三戸二階二重門である。入母屋造、本瓦葺きの西面する建物で棟高16.8メートルを計る。棟札から、幕末期、弘化2年(1845)に建立に着手し、嘉永3年(1850)落慶法会が執りおこなわれたことがわかる。県下では高野山大門に次ぐ重要な建造物である。

第2章 根来寺坊院跡の発掘調査

1 大規模農道の建設と発掘調査

根来寺も10年ほど以前は緑に包まれた山間の静かな山寺のたたずまいをみせていたが、農業用地の開発や碎石場などの周辺開発に加え、昭和51年には和歌山県農林部がすすめるいわゆる大規模農道の建設が山内に至ったため昭和51年度以降緊急発掘調査が実施された。天正13年（1585）の兵火という実年代つきの極めて貴重な遺構、遺物が検出され、わが国における中世研究の最も標識的な遺跡であることが判明した。このため、和歌山県教育委員会は昭和55年度より保存資料作成のため10ヶ年計画の発掘調査を実施し、根来寺坊院跡の規模、内容等を明らかにし、遺跡の保存について積極的な方針が打ち出されるまで大規模農道の建設は農林部の協力のもとに中断された。

2 10ヶ年計画の発掘調査(第一期発掘調査)

(1) 調査の目的と調査経過

昭和55年度より平成元年度に至る10年間の発掘調査は、根来寺坊院跡の全体像を明らかにし、史跡指定範囲や保存整備の方法などを検討する資料作成のため、前山と北山に挟まれた盆地状地形の根来寺山内を中心に25地点に及び、山内で覚鑊創建の円明寺のほか、中近世の塔頭子院や町屋遺構などを調査対象とした（第6図）。

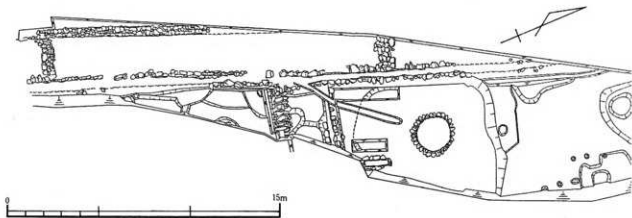
次に、これらの調査成果に大規模農道あるいは町道等の建設に伴う調査知見を加え往時の根来寺坊院跡の実像に触れてみよう。

(2) 調査成果

イ 遺構

古道 江戸末期の遺構として山内の西部に位置する大門あるいは前山の稜線に建立された南古大門などに通じる山内の主要道路の規模については確実な資料は得られなかったが、支線ともいえるべき道として、泉州（大阪府）へ抜ける間道であった桃坂谷では町道がほぼ古道を踏襲していることが町道改良工事に伴う発掘調査で明らかになった（図版16・第4図）。

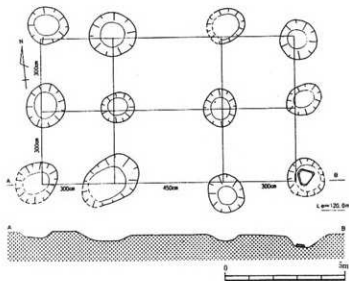
道幅は約2.5メートルで平地部では両側、傾斜地では片側に側溝をもち、とくに傾斜のつよい地点では塔頭子院との取り付きの加減もあってか、緩傾斜を保つため随所に石敷の傾斜部をつくっている。また、谷部に階段状に造成された区割に設けられた塔頭子院をつなぐ道路は幅約2メートルとさらに規模が小さくなっている（図版5-2）。



第4図 古道の調査状況（桃坂線）

大門 現在、岩出町指定文化財となっている大門の概要は先に述べたとおりで、その位置は県道泉佐野岩出線より山内へ約350メートル入った地点に位置する。桃坂谷を南流する蓮華谷川と山内を西流する菩提川の合流地点で、大門を建立するにふさわしい位置であり、前身建物もこの地点を大きく外れるものではないだろう。

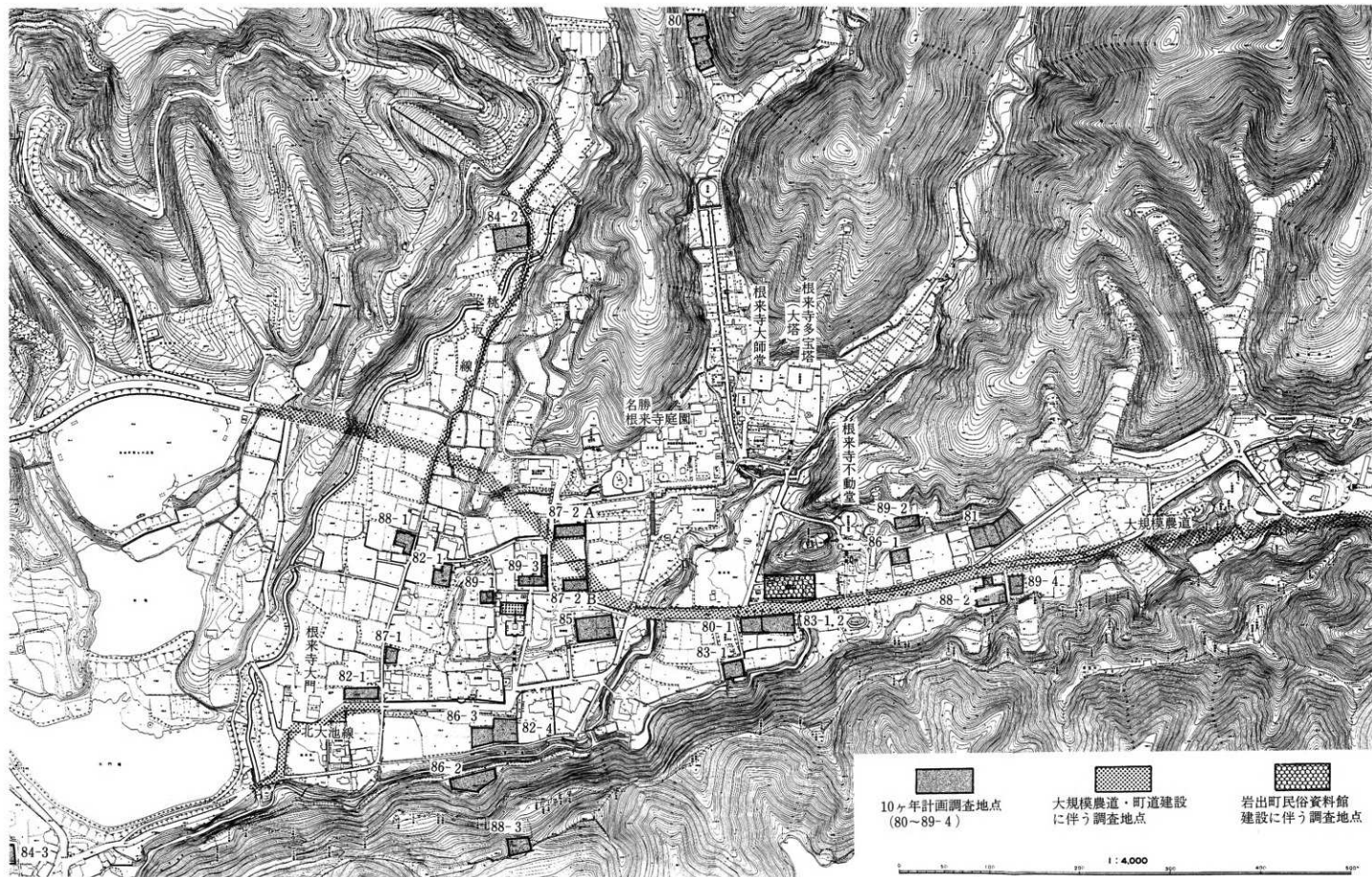
南古大門が前山の稜線上、標高約120メートル（比高差約40メートル）に建立された。県道粉河加太線がほぼ踏襲する大和街道から前山の南斜面を經由して山内に至るもので、円明寺の真南に位置する。前山の稜線を約6メートル切り下げ約25メートル×20メートルの平地を造成し、3間（3.0・4.5・3.0メートル）×2間（3.0・3.0メートル）の大門を建築したものである。天正13年（1585）の兵火を免れたものとみられるが、すべての礎石が持ち去られ瓦類の出土も極めて少ないことから、興福寺多聞院の「多聞院日記」にみえる、兵火の2年後、秀吉の弟、羽柴秀長が根来寺の大門を大和郡山へ移したとある記事に符合するものと考えられる（図版14-3・第5図）。



第5図 南古大門跡礎石抜取穴（88-3）

円明寺 宗祖覚饒の建立になる円明寺は根来寺本坊の東南方に隣接する位置をめている。北山の丘尾が菩提川と蓮華谷川の合流地点へ延び、その端部に形成された東西、南北各々約150メートルの台地上に造営されたものである。現在では縮小された円明寺（興教大師堂、同拝殿等）などと三部権現社が所在する。

大規模農道の当初計画に伴い、台地中央部を発掘調査した結果、東西方向の土塀の基礎かとみられる基壇状遺構や懸仏、和鏡、瓦器など鎌倉期の遺構、遺物が数多く出土するほか、古式の池（図



第6図 根来寺山内地形図と調査地点

版4・第12図上)が露出していることなどから旧円明寺の主要部分であると推定されたため県教育委員会は大規模農道の建設を見直すよう県農林部へ要望することになった。

一方、10ヶ年計画の最終年度にあたり、興教大師堂、同拝殿周辺を中心に発掘調査を実施したところ永祿、元龜、天正など16世紀中頃の年号をもった多量の五輪塔、宝篋印塔、石造地藏菩薩立像等が集中して出土した。石塔などは台座からは遊離するものの、一列に並んで出土する状況などから、宗祖覺鑿を慕い建立された逆修石塔群などと考えられる(図版第2～4・第7図)。

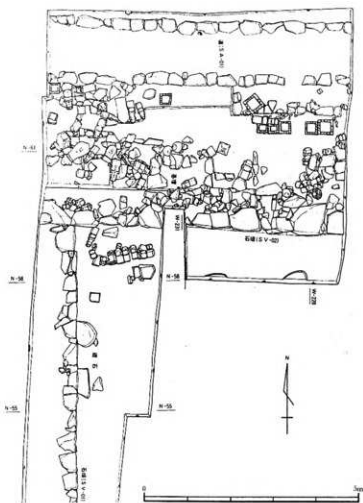
塔頭子院 円明寺、豊福寺など根米寺の中心となる伽藍等が建立された盆地部分と谷間に造営された塔頭子院では自ずと規模や構造上に格差が認められるものであるが、盆地部分の塔頭は天正13年の兵火後も再建されたものが多く、後代の改変が著しいため、一時期を限った実態の確認は困難なことが多い。一方、谷間に営まれた塔頭子院は兵火後廃絶したものが多く、発掘調査によって兵火前の実態を比較的良好に留めている資料を得た。

敷地 その多くが山麓部の傾斜地に営まれたため、石垣を築いて造成しており、大規模なものを使用した石材も大きく城郭の石垣を想起させる。敷地面積は盆地部分のそれが谷間を凌ぎ、前者は間口30メートル、後者は間口20メートルと狭い実態が判明しつつある。

構成 各塔頭子院の多くが敷地の一辺を、余裕もたずに道路に面させたため坊院への出入口は石垣を切り開いて石段を設け、その上端に土塀をもった門を構えている例が確認されている。現在も、主要参道に面した蓮華院でよく似た石階段、門が残されている。

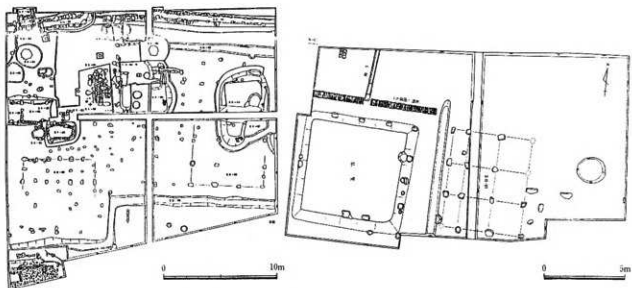
盆地部の塔頭子院は瓦葺きの仏堂と礎石建ちの住坊を並置し、その他、付属屋、半地下式倉庫、社などの他に、生活遺構として井戸、溜槽、排水施設、厩などがみられる。また、規模の大きい塔頭には池庭をもつことがあり、中央部に石囲いの凹部をもつ直径10メートル前後の不整形な浅い池(昭62-187B、図版13-3)、比較的高い石垣をもった池(図版18 岩出町民俗資料館建設用地)などがある。

一方、谷間の塔頭子院は瓦の出土が乏しく、その多くは柿葺あるいは草葺きの主屋、付属屋など

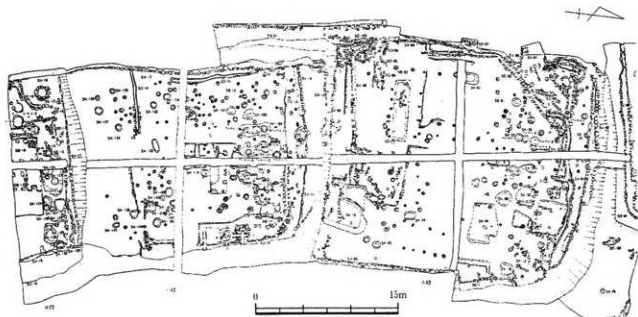


第7図 円明寺石塔群出土状況(89-3)

が混然と建てられていた様子が窺える。このためか、掘立柱穴がめだつ（昭55-'80、図版5、第9図）。このうちでも規模の大きな塔頭子院には泉水をもつものがあり、中島をもつ石積みの方池（図版9-3、第12図下、昭59-'84-2）が確認されている。



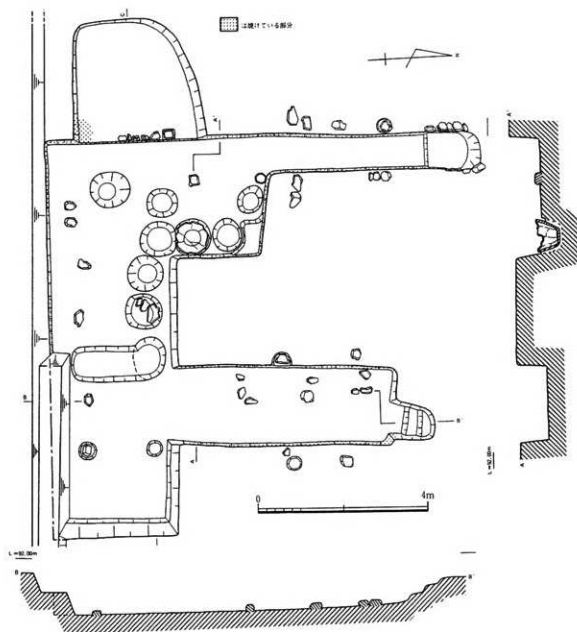
第8図 盆地部の塔頭子院（左85、右89-2）



第9図 谷間部の塔頭子院（80）

備前焼大甕をもつ遺構 二石あるいは三石入のへら描きのある大甕が一行ないし数列に配置され、数個から10個前後の大甕が、体部下半まで埋め並べられた遺構がある。貯蔵施設とみられるが、その他の機能も考えられるようである。

半地下式の倉庫にも大甕が用いられている。昇降口をもった深さ1メートル以上の施設で穴底には東石状の礎石が並ぶ。棚を架けたものや、覆屋の一部を支えた東石などが考えられ、いずれにしろ本格的な屋根をもつものと考えられる(第10図、図版12、昭62-87-2A)。なお、穴の壁面が高温の火気を受けた部分とそうでない部分があり、火災により高熱を受けたものかどうか、また、大甕に貯蔵された物品についても議論を呼ぶところである。



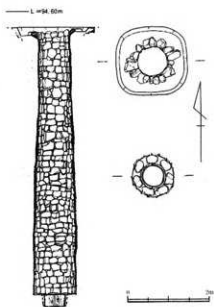
第10図 半地下式倉庫 (87-2A)

町屋と根来塗工房 大門の西側、山内をはずれた地区の調査では、間口8メートル弱の小規模な区割をもつ建物群が検出されている。ある区割からは多量の根来塗碗、皿とともに漆塗り用の刷毛(図版23-9)が出土し、根来塗の工房などが想定される。これらの小区割の建物群は広い範囲で

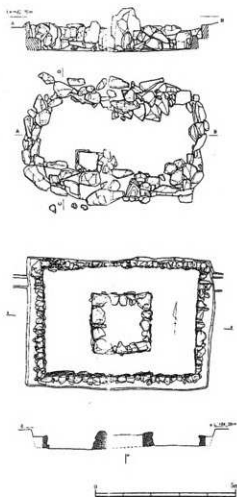
確認されており、根来塗工房などを含んだ町屋が大門の西方に展開したものと考えられる。このなかには、鍛冶場とみられる遺構や鉄砲玉なども検出されている。

城砦の遺構 根来寺は戦国時代、いわゆる根来僧兵が活躍した時期に城砦としての機能を有したと推定されてきた。北は谷深い北山、南は独立状山塊の前山が横たわり山内を囲んでいるためである。前山の発掘調査では稜線上には土塁状遺構、南へ派生する尾根には竖溝とみられる遺構が随所に確認されている。この、和歌山市方面を一望する前山の稜線西端では室町時代の瓦などとともに、槽状の遺構も検出されている。

その他の遺構 地鎮の遺構などがある。大門隣接地の町道改良工事に伴って、浅い土壌内に、それぞれに唐銭（開元通宝）、北宋銭（皇宋元宝 熙寧元宝など）を内蔵した土師器皿を24枚並べた遺構が検出された。土師器や銅銭から15世紀頃のもので、特に念の入った遺構から、よほど重要な地鎮祭が行われたものと見られ、現在的大门の前身建物などの建立に伴うものかとも考えられる（図版17-3）。



第11図 井戸（86-1）



第12図 泉水(上 円明寺跡、下 84-2)

□ 遺物

仏具等 (図版19) 金銅製十一面観音懸仏 (1)、青銅製不動明王 (2)、泥仏 (6・7)、水晶数珠玉や密教法具の銅製護摩杵 (8)、六器椀 (4・5)、地鎮に用いられた金銅製賢瓶 (3) の他、

細波双鳥文白銅鏡（9）さらには石仏、板碑、五輪塔、宝篋印塔の出土も多量にのぼる。

瓦類（図版20・21・第13・14図） 軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、雁振瓦、鳥舎など道具瓦のほか丸瓦、平瓦が多数出土している。軒丸瓦は三巴文が主体で、平安時代末あるいは鎌倉時代の特徴を示す古式のものも含まれる。軒平瓦は鎌倉時代のものとして連珠文をもつもの、均正唐草文の中心飾に三巴文を配するものがある。室町期以降の特徴を示すものには均正唐草文の中心飾に蓮華をよこからみた花飾や、宝珠状を呈する蓮の蕾を配したものや、丸瓦との組合せ時の滑り止めとして両脇に立上りをもつものなどがある。

武器・武具（図版23） 戦国期根来衆の一端を物語るかのように、鉄砲の玉、刀の鯨、鎗、鎧の部分品（鞆(8)）のほか鎧（7）もみられ、傭兵として各地の戦場で活躍した根来衆徒の姿がしのばれる。

根来塗（巻頭図版4-1） 使用の摩耗により黒色の下塗りが浮きでて特有の味わいをもつ根来塗は、根来寺に供給する漆塗りの食器、什器あるいは仏器として、根来寺に隣接する町屋周辺で製作されたのが始まりらしい。「筒井坊」・「理性院」等の坊院名などを記しているものが出土している。

土師器・瓦器類（図版22・23 第15・16図） 中近世を通じて出土する土師器は皿類に限られるといってもよい。灯明皿、地鎮具などに用いられている。15世紀に多見する中型の皿は平安京などにみられる白土器に近似したものがある。

瓦器は12世紀後半の井戸下底より出土した一括資料や片口状に注口部をひねり出した大型の椀（鉢）というべきか、第15図(23)などがある。

また、土師質土器には皿、羽釜、鍋などが、瓦質土器には香炉、火鉢、風呂が多くみられる。

国産陶磁器（図版22～25、第17～20図） 焼きしめ陶器は、14世紀初めから天正までの備前焼、美濃・瀬戸系陶器が量的にも主体をしめ、次には14～15世紀代の常滑焼が、丹羽焼、信楽焼は非常に少ない。なかでも、15世紀代の備前焼が最も多量に出土し、二石入、三石入の大甕や壺、甕、すり鉢の他、花生、水指、水滴など器種が豊富になり、16世紀末頃には備前焼一色となる。美濃・瀬戸系の陶器には天目茶碗、灰釉皿などがある。

江戸期以降は唐津焼、伊万里焼のほか南紀広（和歌山県有田郡広川町）で焼かれた男山焼が用いられている。

中国製磁器 中国製磁器の割合はかなり高く、根来寺が優れた焼物の獲得に努力したことが判る。

白磁（図版26、第21図） 12世紀前半代の覚鑊の時期のものは、景德鎮窯系の椀、四耳壺、青白磁合子など少量の白磁類に限られる。15世紀代のものは皿、杯が多く、16世紀代のものでは端反りの皿が特に顕著である。

青磁（図版27、第22図） 13～15世紀代には竜泉窯の盤、壺、香炉、椀、皿が多量に輸入され、特に、14世紀代は青磁一色の時代となる。

染付（図版29・30、第23図） 全国的にも極めて稀な14世紀前半代の元染付片口（図版29—1、第23図1）のほかは、15世紀中頃以降の大振り椀など、明時代景德鎮窯系の染付が青磁を凌ぐようになり、16世紀中頃以降は椀、皿、杯がセットとして用いられるようになる。

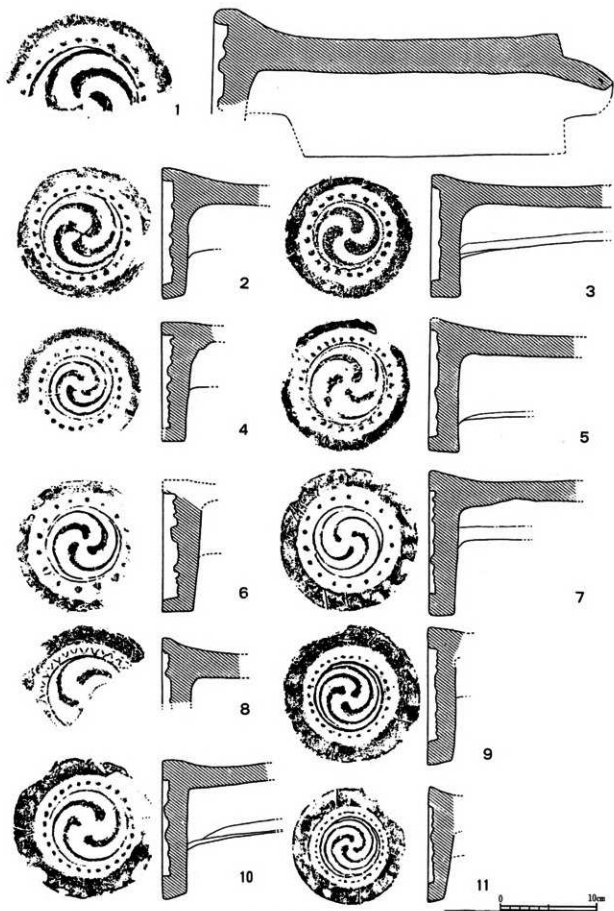
その他の輸入陶磁器（図版28） 中国本土の優れた磁器以外に、14～15世紀代とみられる交趾三彩の型押仏座(7)や、ベトナム製の椀、16世紀前半から中頃にかけての、いわゆるルソン壺(8)など鉄釉陶器、褐釉陶器、12～13世紀の高麗青磁(8)などが出土している。

（3） 小結

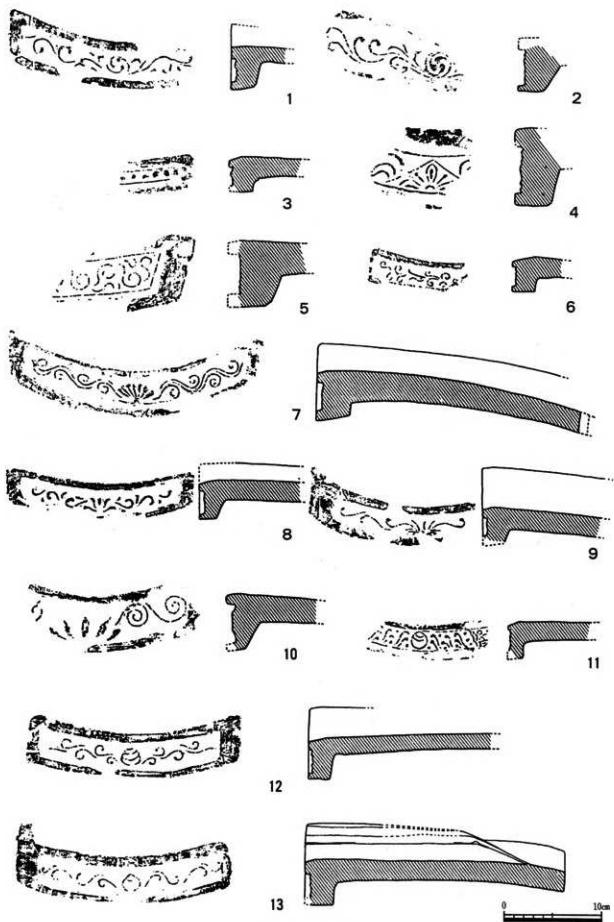
大規模農道の建設に伴う昭和51年度の発掘調査以来、確認できた遺構、遺物の調査資料は膨大な量で、また、内容もバラエティーに富んでいる。

天正13年（1585）の兵火による諸伽藍や諸器物の焼失という大きなダメージは受けたものの、主要伽藍、塔頭子院の諸遺構や、遺物の面では陶磁器類を中心に良好に遺存し、天正13年（1585）というメルクマルのもとに、中近世の物差しが作成できた。

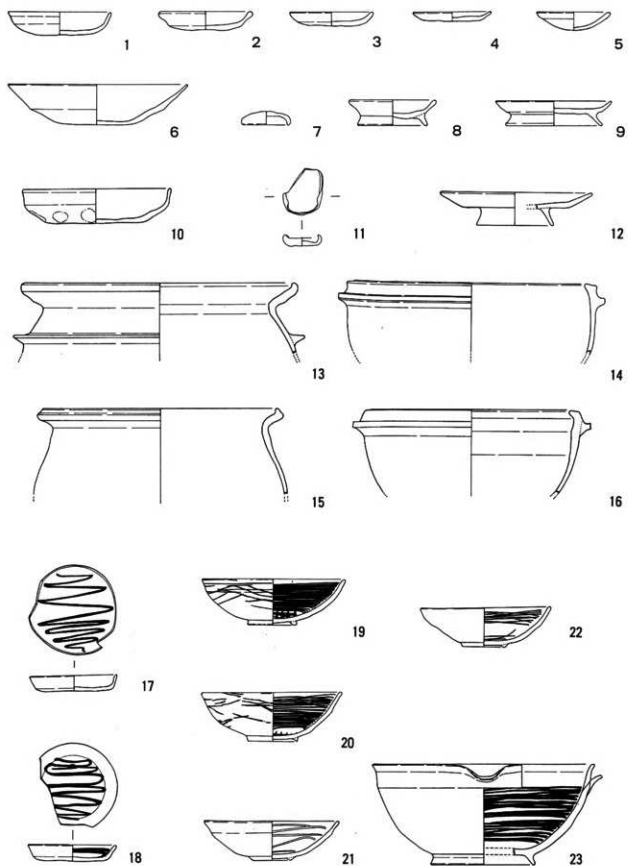
根来寺坊院跡の調査資料が注目されるいまひとつの要因は、根来寺変遷に関する二つあるいは三つの画期がそのまま遺構、遺物に具現されているからである。すなわち、覚鑊の死後、根来衆徒が高野山へ帰山してから約1世紀半の空白のあと、大伝法院11世座主頼瑜が根来寺へ戻り大いに隆盛を極めるが、天正の兵火で一山烏有に帰し、その後、紀州徳川家の援助のもとに復興するという、歴史的経緯をメルクマルにした遺構、遺物の編年確立はひとり根来寺だけでなく、中世日本の各時代における生活様式そのものの変遷を明らかにすることができるのであり、これら調査資料の整理と操作により中世三大遺跡の一つと呼ばれる根来寺坊院跡の今後の保存と活用の方向付けが可能となってきた。



第13图 軒九瓦

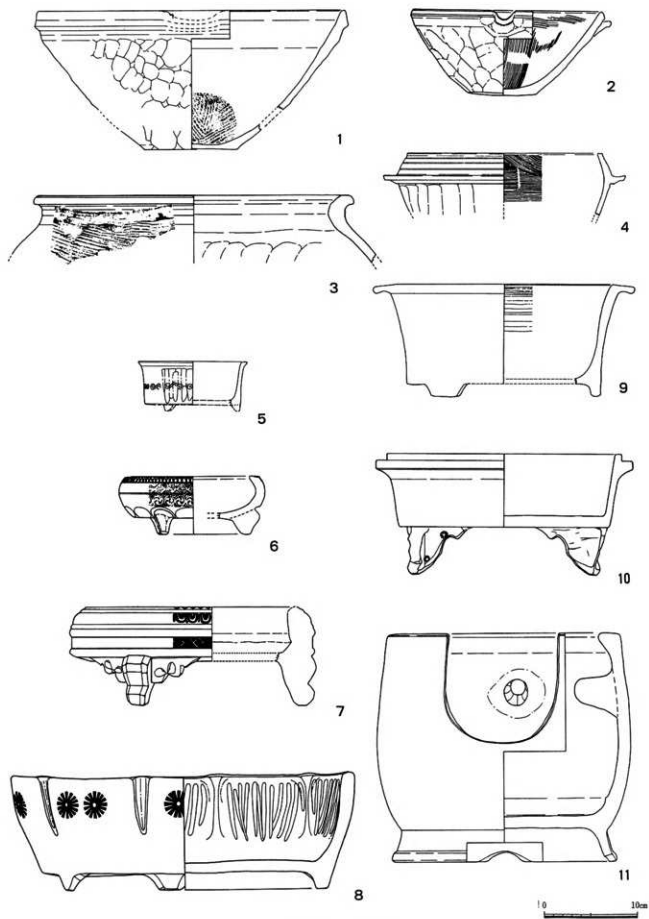


第14图 軒平瓦

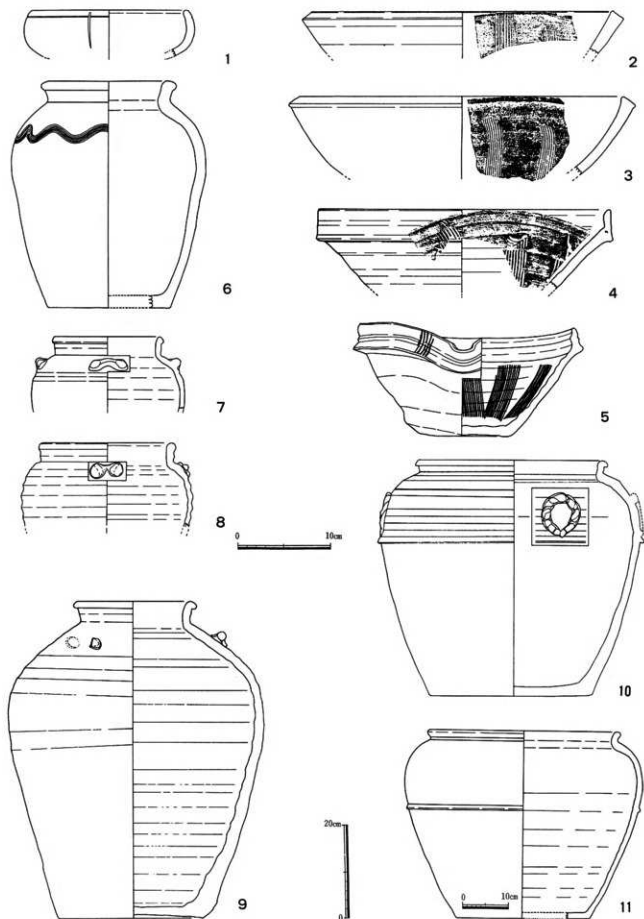


第15圖 土師器、土師質土器、瓦器

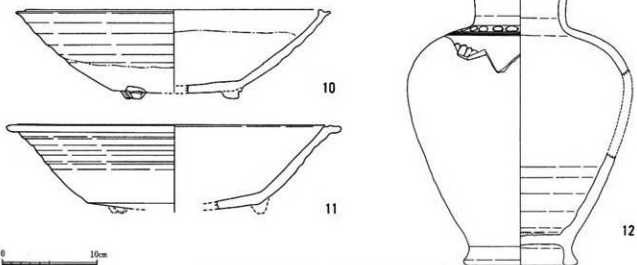
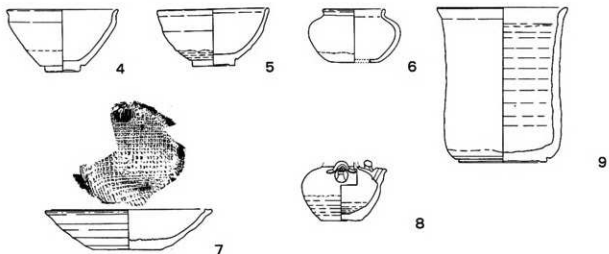
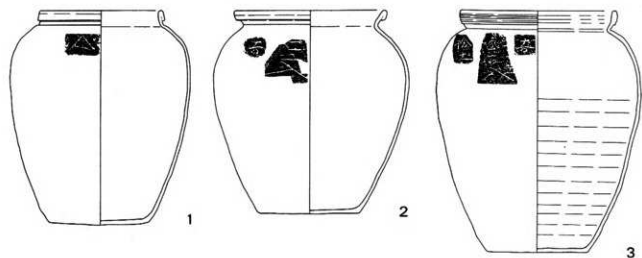




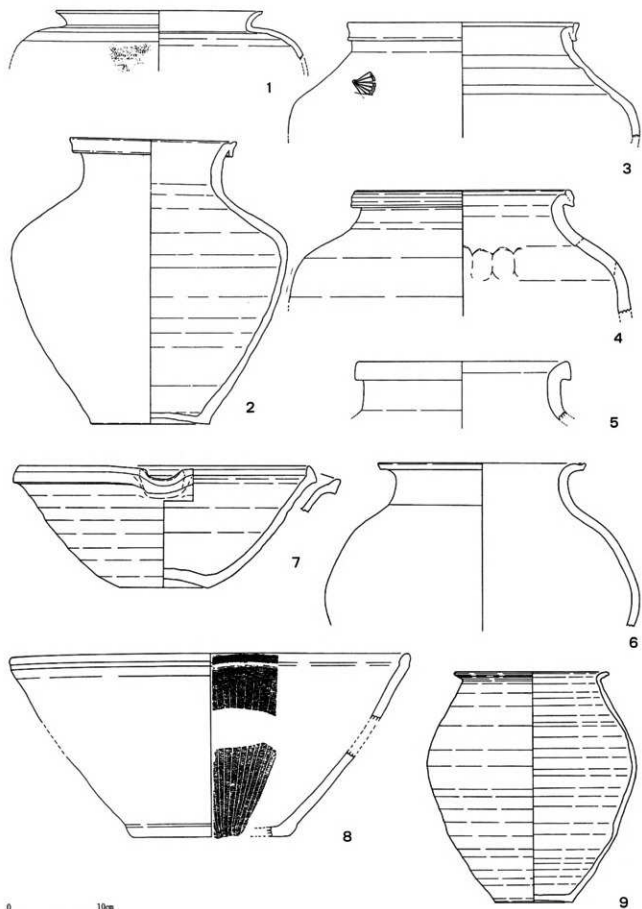
第16図 瓦質土器



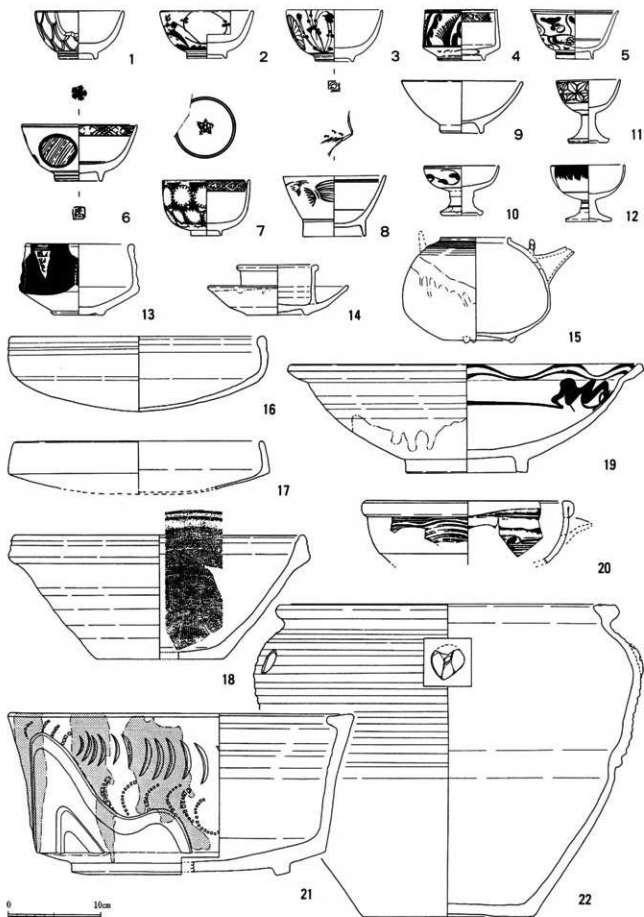
第17図 備前焼



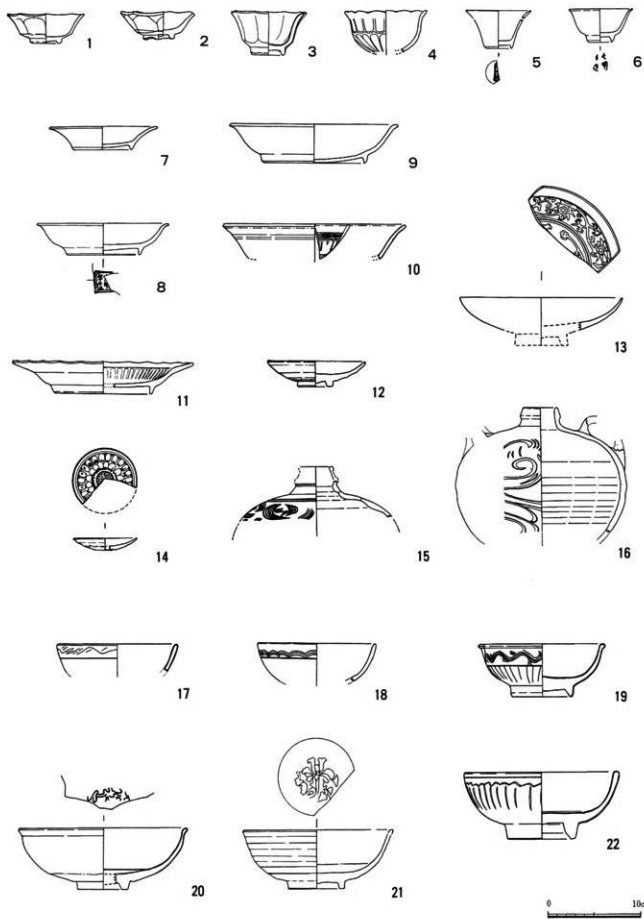
第18図 備前焼大甕、美濃・瀬戸系陶器



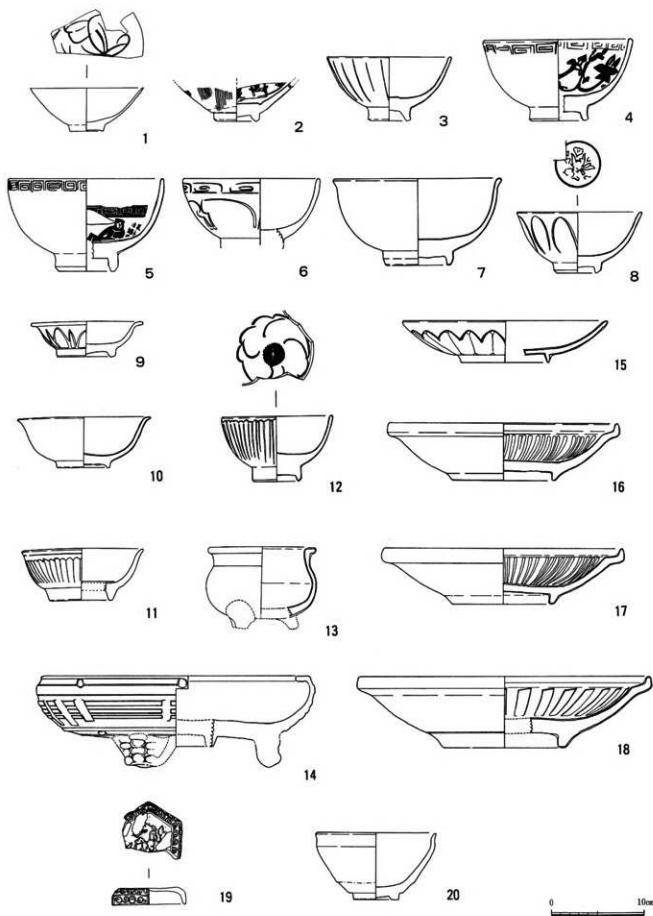
第19图 常滑烧



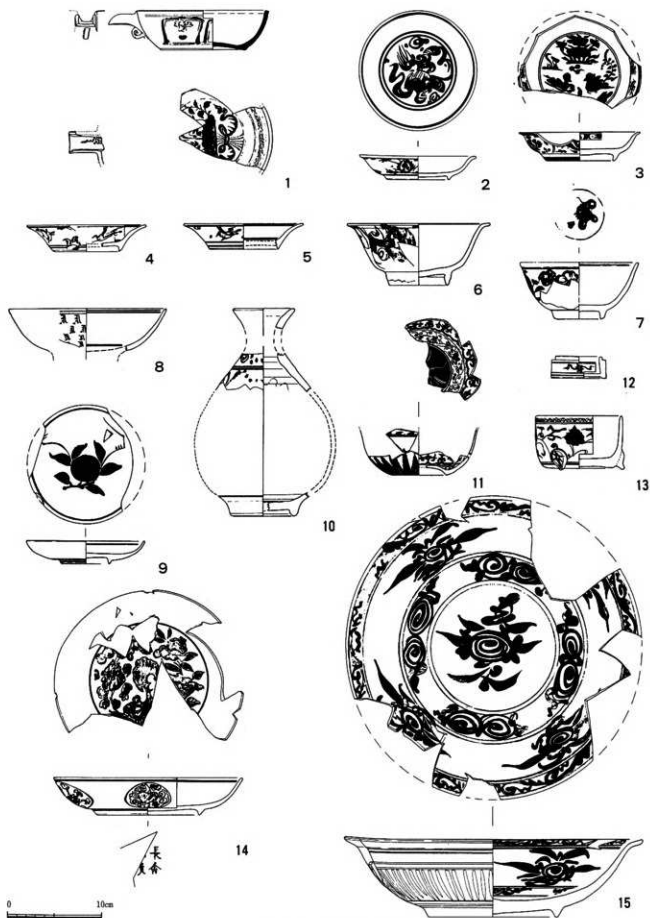
第20図 伊万里焼その他の国産陶磁器



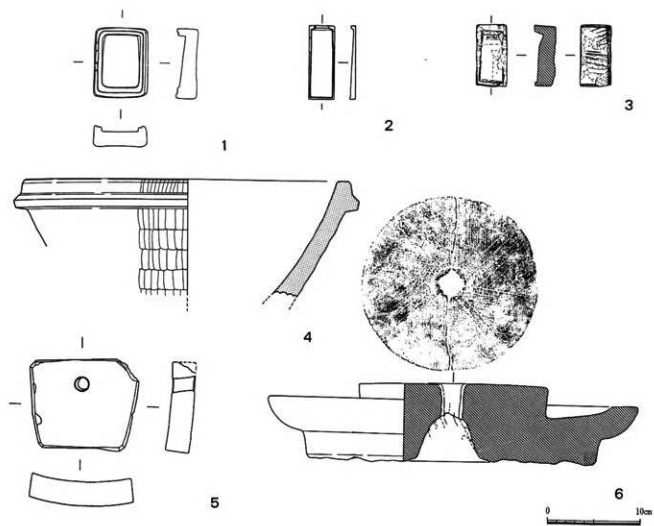
第21图 中国製白磁、青白磁、青磁



第22图 中国製青磁、交趾三彩、天目



第23图 中国製染付磁器



第24図 石製品・硯（1～3）、石鍋（4）、石臼（6）他

第3章 根来寺坊院跡の保存

1 趣旨

ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスが1549年から1578年に書き綴った「日本史」に一大共和国の如きものといった根来寺は、天正13年羽柴（豊臣）秀吉の紀州攻めによりその栄盛を途絶した。戦国時代を代表する一大勢力として、日本の中近世の激動する時代に大きな位置を占めた根来寺は、また紀州にあっても雑賀衆、太田党とともに一種の自治共和国として、紀ノ川河口部、中流域を統治していた。全国的には織田信長の戦国大名統合により戦国時代の終りを告げようとするのであるが、ひとり紀州は雑賀、根来衆により依然として中世的世界を展開していたのである。根来寺坊院跡は、昭和51年度以来の発掘調査により日本の中世三大遺跡として大きな注目を集めている。しかし、一方では日本古代末から中世社会に大きな比重を占めた根来寺ではあるが、文献資料などが灰燼と帰し、現段階ではその研究は根来寺周辺のごく限られた史料によらなければならない状況である。土中に埋もれた遺構の発掘調査は、いわば窮境に立たされた根来寺研究、ひいては、日本中世史研究の解明の手がかりとして光明を与えるものであり、根来寺坊院跡の保護が叫ばれる所以である。

日本歴史の上で極めて重要な遺構である根来寺坊院跡をひとりと歌山県民だけでなく国民の文化遺産として永久に保護するためには、今後も歴史的学術的側面からの徹底した究明を行い、国民一人一人が「歴史との対話」ができる文化財保護行政の方向付けを図らなければならない。

2 保存整備計画（案）

（1）史跡指定計画と買収計画

根来寺山内は歴史的景観が比較的良好に保存されてきた。しかし、大規模農道の建設あるいは町道の整備、さらには、民間等の住宅、店舗等の建設による開発から歴史的景観を保存するには、史跡指定と根来寺山内の史跡整備を進めなければならない。

根来寺の歴史的景観の保全範囲は現在県道泉佐野岩出線から県緑花センターに至る、いわゆる根来寺山内とその南北の山塊を含む必要があり、その面積は東西約1.7km、南北約1kmの緑あふれる景観を対象とすべきである。

しかし、土地所有の実態、あるいは開発との緊急な対応から史跡指定の範囲は山内の平地部と南側の山塊、すなわち前山の北斜面と北側山塊の南斜面を中心とした地域になってこよう。

平地部の史跡指定については、宗教法人根来寺有地を中心に、円明寺他主要寺院跡を包括した指定が必要である。また、この他、発掘調査で確認されている古道、これに面して造営された主要な坊院跡を指定すべきであろう。

また、前山については東西に連なる稜線より南斜面の一部を含めた頂稜部と北斜面は城塞的な性格を保存するために全域指定が望まれる。また北山の南斜面は国指定名勝根来寺庭園を含む周辺山稜部の指定が必要である。

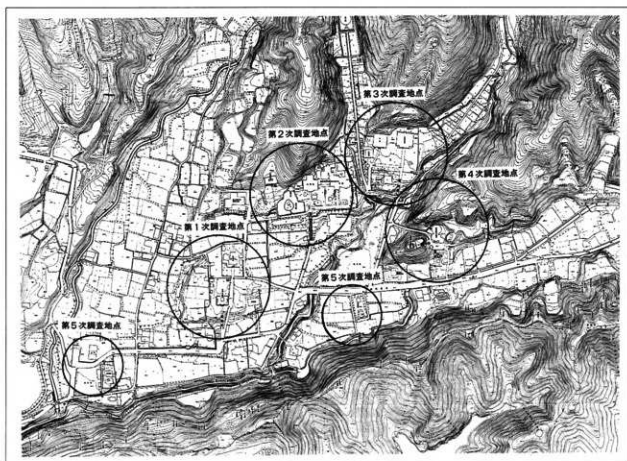
これら指定地は将来史跡公園として整備をすすめ、一般の人々が山内を散策するとき、豊かな自然環境の中で、根来寺の歴史的記念物を全面的に享受できるように最小限必要な面積でもある。

史跡指定地の買収地域は主に民有地を優先することとし、遺構の露出展示や復元が可能な地域を対象とする。また必要に応じ寺有地の円明寺等主要寺院のうち土塀や住房等が復元整備できる地域の買収を進める。

(2) 第二期発掘調査計画

昭和55年度より10ヶ年計画で実施してきた山内全般の調査から、円明寺ほかの根来寺坊院跡の最も重要な部分の整備をはかるために調査を実施する。

史跡の環境整備は厳密な発掘調査の結果に基づいて行われるわけで、今後5ヶ年計画で、来訪者が最も学問的興味を持つ6地点の調査を計画的に進める。



第25図 第二期発掘調査計画図

年 度	場 所	主 要 遺 構
平成2年度	円明寺周辺	宗祖覚鑊建立の寺院跡と逆修石塔群
3年度	根来寺境内西部	豊福寺跡
4年度	大塔周辺	大伝法院跡と大塔の前身遺構
5年度	不動堂周辺	密厳院跡
6年度	大門、御廟周辺	西大門跡、御廟跡遺構

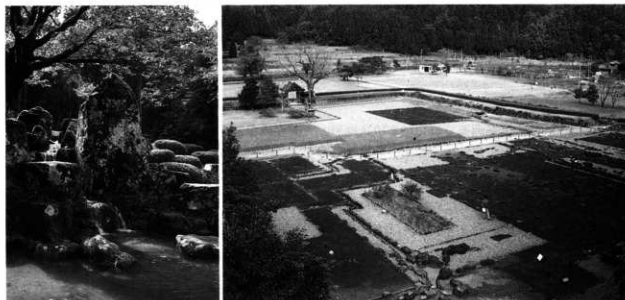
(3) 史跡公園整備計画

根来寺へは年間75,000人を越える参拝者と25,000人以上の観光客等併せて10万人以上の人々が訪れ、このうち約1万人が平成元年4月に開館した岩出町歴史民俗史料館を見学している（平成元年4月～9月末まで）。

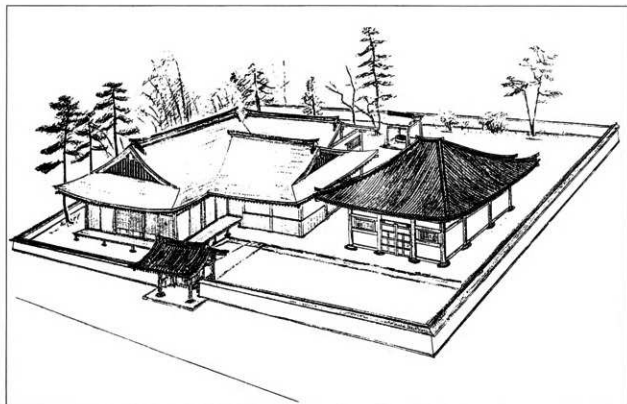
今後、関西新国際空港の開港など泉南、紀北地区の開発に伴う人口増に比例して根来寺を訪れる観光客等が豊かな自然と歴史的風土を求め益々増加するものと見込まれる。これらの人々のニーズに応じるため、五感に訴える史跡公園の整備を進める。

イ 遺構展示地区

発掘調査によって明確になった坊院跡、古道などを平面的に復原する。坊院跡の全貌が最もよくわかる例を選び、石垣、門跡、堂跡、住房跡、倉庫跡などの基礎遺構の露出展示を行い、根来寺坊院跡特有の埋堦遺構の展示では備前焼大甕を復原焼成し展示するなど実感として理解できるよう図る。対象地点は桃坂谷、密厳院東部に配し、大阪側の旧和泉街道と東部からの導入に備える。



第26図 露出展示例（福井県一乗谷朝倉氏館跡）



第27図 立体復原案（「根来寺展」より）

ロ 立体復原地区

発掘調査の成果、文献資料などに基づいて、建物、土塁、漆、井戸、庭園などを可能な限り正確に当初の姿に立体的に復原し、坊院の宗教生活の環境を見学者に視覚的に理解させる展示で、現存する堂あるいは住房などを活用する方法も検討する。

対象地点は円明寺、大塔周辺、錐鑽不動堂など根来寺の中心地域のほか西側の県道泉佐野岩出線からの導入口である大門周辺をあてる。

ハ 修景地区

未発掘地区は、発掘調査での知見と現状地形、文献資料などを参考にして、できる限り往時の姿を偲ばせるよう地域住民の協力を得て修景を行う。

現在の駐車場は芝生、低木を植栽し静的レクリエーションの場とするなど公園利用を再検討する。なお、人家密集地の周囲には緑地の緩衝地帯を設け、住民の生活を利用者の喧噪からまもるとともに民家集落と歴史的景観との調和をはかる。

ニ 山林保全地区

自然環境の大部分を占める前山および北山は遠景、中景としても重要なものである。遠景あるい

は借景として活用価値の高い北山は現状を維持する。前山は南門跡の整備地点もあるので、南門跡への導入を図る山道を整備するとともに、下草、小枝を伐採し、山林に薪炭を求めたであろう往時の山林を復原する。

ホ 施設地区

史跡公園の核となるのは宗教法人根来寺と岩出町民俗資料館である。

宗教法人根来寺は往時の根来衆徒の精神を参拝、参観者に訴えるとともに、宗教施設を通じて人々に精神的な安らぎを与える。また、名勝の庭園なども巡回式に展観できるよう図る。

岩出町民俗資料館は根来寺の歴史を遺構模型展示、遺物展示、ジオラマ等を用いて見学者に学術的に理解を促すとともに、図書室、資料室などを一般の活用に供し根来塗実習等体験学習の場とするなど学術的基地とする。

また、根来寺西部の若もの広場はスポーツの場とともに駐車場や歴史イベントなどの広場として活用する。更には、県緑花センターでは岩出町民俗資料館での根来塗りの実習などを行うため、漆畑などを復原するなどして中世根来寺をメインとしたイメージをわきたたせるような展示、活用を図る。

3 開発との調整と史跡管理

史跡公園が完成した姿は宗教法人根来寺の土地や諸施設、あるいは民間より公有化した土地、整備施設などが混在するためその維持管理は種々の方策が考えられるが、最も適当なあり方は、県、岩出町、宗教法人根来寺が応分の負担を分かちあうため共同出資の法人を組織して公園施設の管理に当たるのが望ましい。

なお、史跡指定地外の開発には十分な事前調査が必要で、追加指定も考慮にいたれた保存対策が望まれる。史跡指定に至らない場合は開発構造物は史跡公園地内にふさわしい形状にするなどの配慮が必要である。

図版1 航空写真





1 円明寺現況



2 逆修石塔群



1 逆修石塔群部分



2 同上細部



1 泉水



2 同上



1 谷間の塔頭子院



2 谷間の古道



3 塔頭全景



1 菩提川と盆地部の塔頭



2 同上部分



3 溜槽



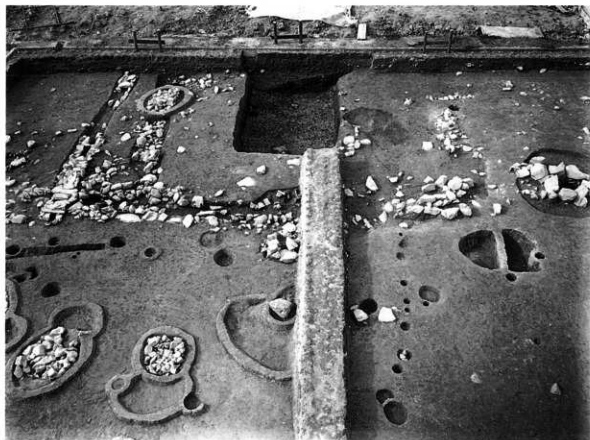
1 盆地部の塔頭



2 同上部分



3 同上埋桶等



1 盆地部の塔頭



2 同上部分（貯蔵施設）



1 谷間部の塔頭



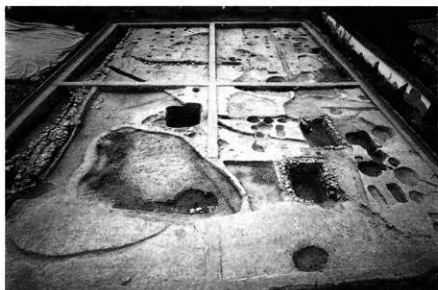
2 同上部分



3 同上泉水



1 盆地部の塔頭



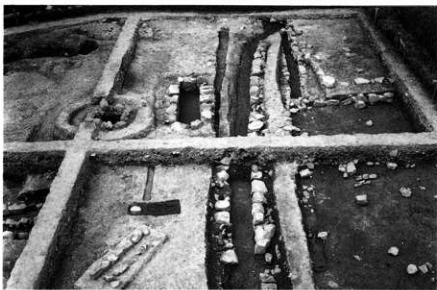
2 同上



3 同上部分



1 盆地部の塔頭



2 同上部分



3 同上井戸



1 半地下式倉庫をもつ盆地部の塔頭



2 半地下式倉庫



3 同上細部



1 盆地部の塔頭 (道側溝と土塀基礎が重複)



2 同上 半地下式倉庫



3 同上 池



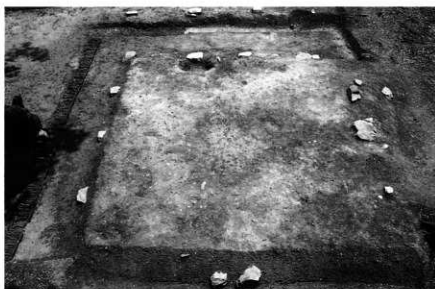
1 盆地部の塔頭



2 同上部分 (排水施設と溜槽)



3 南古大門跡



1 山麓の塔頭 (堂)



2 同上 (庫裡)



3 同上細部 (雨落など)



1 桃坂古道と塔頭の石垣



2 古道の石畳



3 桃坂谷の塔頭



1 盆地部の諸施設



2 半地下式倉庫



3 地鎮施設の細部



1 盆地部の塔頭



2 同上部分（石積の溜槽）



3 同上細部（鉄湯釜出土状況）



1



2



3



4



5



8



6



7



9



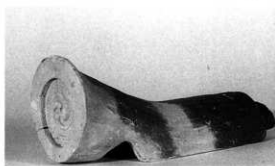
10



11



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



1



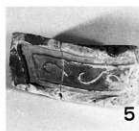
2



3



4



5



6



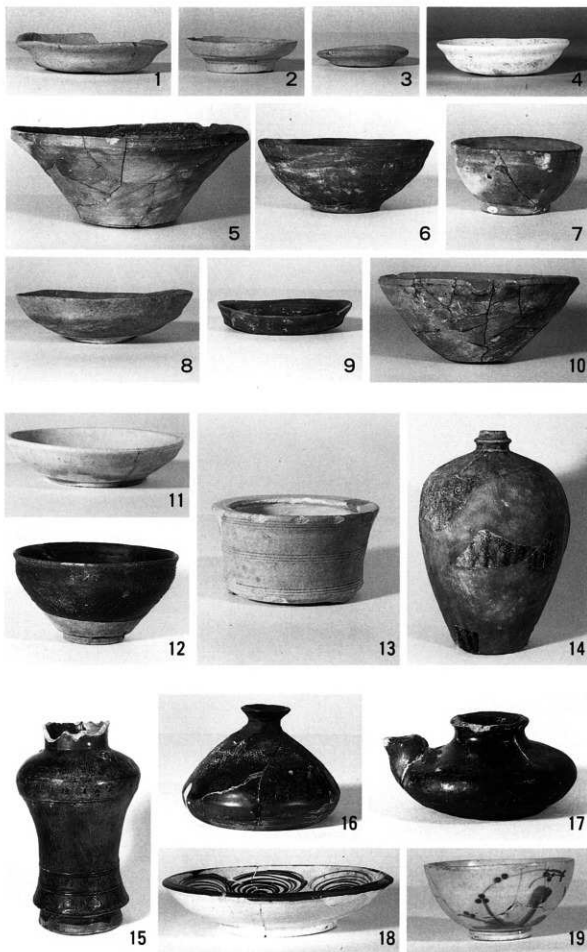
7



8



9





図版 24
備前焼 (1)



1



2



3



4



5



6



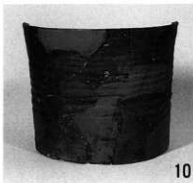
7



8



9



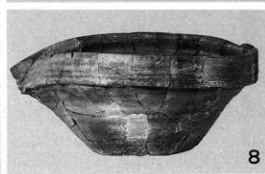
10

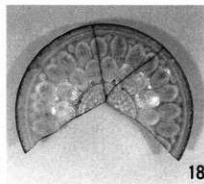
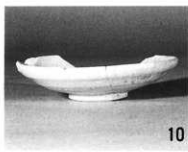
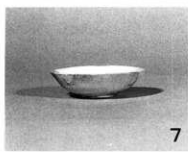
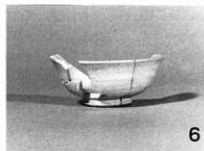
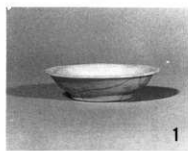


11



12







図版 28 中国製青白磁その他舶来陶磁器





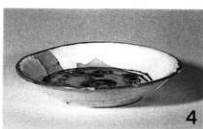
1



2



3



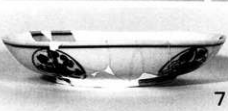
4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16

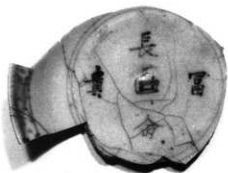


17

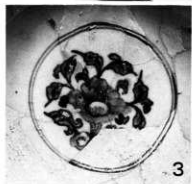
図版30 中国製染付磁器細部



1



2



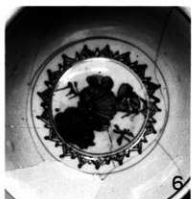
3



4



5



6



7



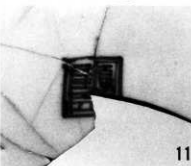
8



9



10



11



12



13



14

根 来 寺 坊 院 跡

— 発掘調査10年の歩み —

平成 3 年 3 月 31 日 発行

編 集 和歌山県教育庁文化財課
発 行 和歌山県教育委員会
印 刷 初田印刷株式会社